



今年度の「着がわりプロジェクト」のラストを飾るのは島州一（しま・くにいち）さんの展覧会です。会場正面の壁面には《Tracing-Shirt》の連作群がぎっしりと並びました。みずからのシャツを丹念に「トレース」し、水彩で着色したこのシリーズは、すでに10年近く続いている島さんのライフワークの一つです。

連作のはじまりを島さんは次のように記しています。「噴煙を生きている証拠のように出し続ける浅間山連山の南斜面に住んで15年程になる。……浅間を日常に感じながら浅間を描く為には、云わば浅間の同義語といったものを探さなければならなかった。そこで出会ったのがシャツである。……自分がシャツを着ているところを想像すると、シャツが大きなゆったりとしたスローブをもつ浅間山の山肌で、シャツの各部分の形状が沢や谷であったり、林や畑、道路や街といった様々な表情をもっているところがシャツの表面の各部分に相当できると思った。……自分の肩や胸が連山の斜面だと思って小人になったつもりでシャツの部分を実際にトレースして行く。」（島州一「山はいつもシャツを着替える」2007）

ひと月に1～2点のペースで暦をめくるように制作されるこの連作も、自然の猛威を見せつけられた2011年の大震災や作者が体感したさまざまな季節・歳月を経てたえず変化し、展開してきました。

《ASAMAいろは歌》47点の連作も今回一堂に展示しました。おなじみのいろは歌を身近なASAMAをモチーフに変換して制作した水彩画に、独特のユーモアと機知を加えて再構成したものです。展覧会にあわせSMF出版第2弾として特製のアートポスター（A1判）も刊行されました。

これらの水彩画に加えて《言語の誕生》を絵画の発生になぞらえた独自の油彩画の制作も続けられていました。パースペクティブではなく、平板に並ぶ色や形によって画面全

体が埋め尽くされていく自作の手法を、作者は思いつくままに並列して言葉が放り出されていくラップの形式になぞらえています。今回は椅子のアイコンを「添景」として加えた油彩画が展示されています。

小諸への転居後、20年余の主要な作品を紹介するのが本展の目的ですが、「版」の概念を拡張する70年代の作品や80年代の《Finger Print》や《アナログとデジタルの変換》、90年代初めの《影の梱包》シリーズもあわせて展示しました。「版」から出発し、「もどきレーション」から「トレース」という一貫した造形思考の展開を概観できる構成です。

オープン初日の1月23日には、島州一さんと20年にわたって島さんの個展を開催し活動を見守ってきた双ギャリーの塚本豊子さんをお迎えして、スペシャルトークを開催しました。（1/23～31の8日間の入場者：1219名、トーク来場者28名）
中村誠（SMF事務局）



「島州一のASAMAいろは歌」特製アートポスター

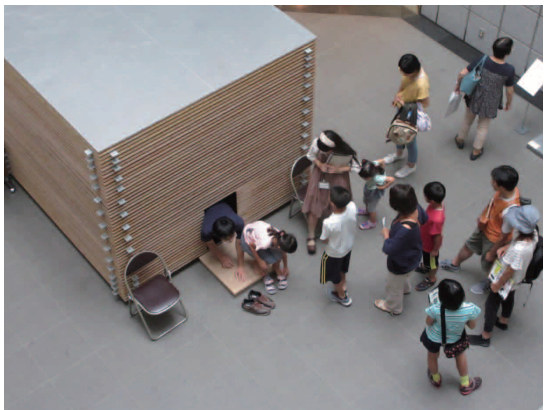
2016年1月23日（土）～4月10日（日）@ MOMAS 埼玉県立近代美術館 1階展示室

MOMASコレクションⅣアーティスト・プロジェクト：島州一 世界の変換と再構築

ご対面となりました。前面中央下部に茶室の躰（てい）のような小さな開口部があり、靴を脱いでひざまずいた体験者は四つんばいで内部に入り、小さな家を体感することになります。

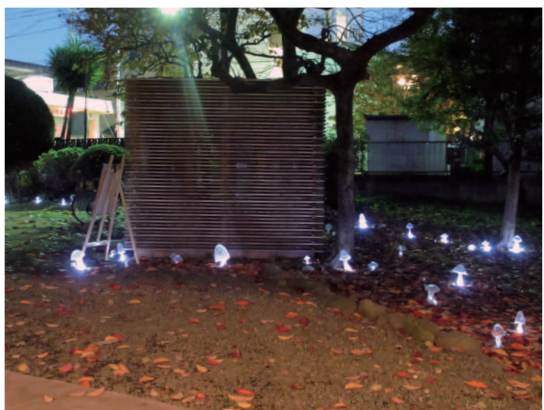
夏休みの美術館を訪れる子どもたちにサポートスタッフのみなさんがていねいに対応してくださり、1000人を超えるみなさんに体験していただくことができました。「外は四角で中は丸」「驚いた」「最初は閉じ込められたように感じたけど、慣れてくるとひとりの世界を楽しめた」「意外に落ち着くし居心地も悪くない」など、さまざまな感想が聞かれました。（入場体験者：12日間・計1104名）

中村誠（SMF事務局）



たのかもしれませんが。時期的にも、庭の柿の木が紅葉し、実が熟し、さらに葉が落ちる秋から冬を過ごしたこと、朝から夜への時間帯や、ちょうど七五三で多くの家族が内部の空間まで体験したことなどもふくめ、「旅する小さな家」は時間のなかも旅をしたのだと思うようになりました。

そして後半、井上唯さんの「旅するキノコ」が仲間入り。「旅する小さな家」のまわりから庭全体に、さらに道をへだてたわが家にも、合計150ほどの小さなキノコのオブジェがLED照明に照らされて浮かびあがりました。夕暮れから夜、さらに朝も、多くの人びとの視線を集めていたのは、手作りの糸によるキノコの有機性が、白くて抽象的な照明と絶妙なバランスを保って、ふだんの街角に軽やかな覚醒をあたえたからでしょう。 青山恭之（SMF運営委員）



見えるようで見えない、聞こえるようで聞こえない、開かれていて同時に閉ざされている、プライベートとパブリックを往還する壺中庵のような不思議な家。それが2014年夏のアート空間デザインコンペ「旅する小さな家」で、200点を超す応募作品の中から最優秀作品に選ばれ制作された作品です（「旅する小さな家～二つの場所で起こること～」、設計：水谷隼人さん+山本恭代さん／協力：山崎千恵さん）。

2014年11月に別所沼公園のヒアシンスハウス前庭でお披露目され、今回は埼玉県立近代美術館の吹抜けにやってきて、この場の主のマンゾーの彫刻《枢機卿》と



11月12日から24日まで、「旅する小さな家」がわが家に近接する日本茶喫茶「楽風」に設置されていた期間は、普段の日常のなかにアートが住みついたような、不思議な非日常性を感じる二週間でした。さらに後半の一週間、「旅するキノコ」は「楽風」からわが家の中庭にまで生息し、アートを見る人びとの視線が、その中庭を都市化するような経験も味わいました。

「旅する小さな家」は「楽風」で、昨年度から三度目の旅を経験したわけですが、設営を見守っていた作者の水谷隼人さんによると、この場所がいちばんしっくりするとのこと。大都会の中心でもなく、かたや広大な自然のまっただなかでもない、人間のスケールの「庭」という空間に、純粹幾何学的なのに身体的な「旅する小さな家」がフィットし



アート日和 旅する小さな家がやってきた

2015年8月11日（火）～23日（日）@ MOMAS 埼玉県立近代美術館 センターホール
11月12日（木）～24日（火）@ 楽風 日本茶喫茶 楽風